

もっとできる。もっとやれる。

令和4年4月1日、金井高校野球部の指導者が変わった。選手達は、ようやくコロナ感染対策のための部活制限が解除され、無事に大会を戦うことが出来た数日後だった。

体育館の下でティーバッティング練習や校舎の外周のランニングと各々に活動していた。選手達は、見慣れない大人が練習を遠目から見ていることに気づくと「こんにちは」と挨拶をかける。和やかな空気が漂っていた。暫くして、新年度の顧問の任命が終わり、さっそく新体制のミーティングが行われた。3年生7名、2年生10名、マネージャー1名。近年の神奈川県公立高校野球部の状況を考えると人数は多い。大きな輪がつくられていたが、不安と緊張・・・そんな中、新しい指導者の挨拶に選手達は耳を傾けていた。翌日、予定されていた練習試合がさっそく行われた。新しい指導者は監督として、ベンチに入る。監督から選手へ問いかけられた。「私は、今日の試合、あなた達の野球を黙って、見させてもらってからアドバイスをしていくことが良いのか、その都度、思ったことを話してもらいたいのか・・・。どちらから自己紹介をしていくかという選択なんだけど・・・」そんな提案だった。少し間が空いて、キャプテンが、まずは自分たちの野球を見てもらいたいと提案があった。しかし、すぐに他の選手からは、どういう選択をすれば良いのか、後でアドバイスされてもよく理解できないことが多いのでその場で伝えてほしいと・・・どちらの意見も選手達の素直な思いだった。そこで練習試合の方針は、攻撃のサインはなしとして、状況に応じて監督と相談して決めていくことになった。試合は、序盤、集中力のある丁寧な試合がお互いに展開されていた。バッターは気持ちの良いスウィングで相手にプレッシャーを与える良い打線だった。脚の速い選手もいる。各々に声を出しながら、はしゃぎながら試合をしている。本当に楽しそうに野球をやっている。そんな印象を監督はもっていた。ただ中盤から終盤、守備のエラーや四球が続き失点、そしてピンチは続く。とたんに愚痴や文句が出始めた。徐々に声もとまる。一喜一憂・・・その場その場に素直に反応する。点差は、1点ビハインド。なおも0死ランナー3塁。何の迷いもなく前進守備。そこで守備のタイムをとり、監督はベンチで「あなた達ならあのチームからあと何点、とれるの？」と問いかける。すると「5点はとれますよ。」ある選手は笑いながら言った。そしたら、「点数上げて、アウト取ったほうがよくない?」「たしかに・・・」そんな会話ですぐに守備体型が変わった。その後、1点を失うことになったが、そこでチェンジ。次の回、状況をチームで整理することにした。相手チームとの比較をしながら、具体例をあげながら、試合終了まで見据えて試合を展開していこうと監督から話があった。選手達は納得した様子だった。その回の攻撃、連打で出塁。盗塁の狙うポイントもアドバイス通り、果敢に実行する。あっという間にベンチで選手が言ったとおりに5点をあげていた。試合は勝利に終わった。試合終了後、選手は満足気な表情を浮かべていた。これまでの公式戦や練習試合の結果や内容を監督が尋ねると、勝ったことはほとんど記憶にない。公式戦もコールドで負けたという。監督は驚いた表情を見せていた。彼らのポテンシャルは決して低いものではない。いつもは、投手が四球を続け、守備はエラーが多い。集中力も緩慢になってしまうということだった・・・。



練習日、30分前にキャプテンが集合場所にやってきて、1人で黙々と準備をはじめていた。練習時間になった。集合する気配がない。暫く立って、キャプテンの集合の声とともにバラバラと集まってきた。ただ、そこには全員いるわけではなかった。かまわず監督は、練習内容を伝えるミーティングを始めた。するとポツポツと遅れて、選手がやってきた。練習は特に声を出して活気がある練習をするわけでもなく、だが、だからといって、やる気がない雰囲気でもない。遅れてきた選手も練習メニューは真面目にこなす…。呼びかけると選手はやろうとする。何も指示がないとすぐに集中力が散漫になる。そんなサイクルが続いていた。だから、ミーティングを少しずつ重ねて言った。「野球部で活動していて、みんなはどうなりたいの？」そんな問いにキャプテンは、チームが勝つことだと答えた。昨年と同じように夏の大会で3回戦まで勝ち上がりたい。その言葉を発した。他の選手達は、「バッティングで活躍したい。」「試合で活躍したい。」「自分の役割を果たしたい。」「チームに迷惑をかけないようにプレーしたい。」「上手になりたい。」そんな声が挙がっていた。彼らは、チームで成長していくという気持ちがまだ少ないようだった。野球が楽しいと感じるといっても、様々だ。ボールを投げる。ボールを打つだけで楽しいと感じる。速い球が投げられる。遠くに打つことが楽しいと感じる。試合で活躍することが楽しいと感じる。自分が活躍して、試合に勝つことが楽しいと感じる。応援がある中でプレーをすることが楽しいと感じる。そして、チームが勝つことが楽しいと感じる。人によって感じ方は違う。話をしながら、それぞれの気持ちが整理されていく。でも、やっぱり…応援されるチームになりたい。勝つチームになりたい。当然のことだったが、言葉にすることで選手達は自覚していた。目指したい方向性は、「応援されるチーム」「勝つことを目指すチーム」。ただ、勝つことを目指すチームとなると急にハードルが上がるように感じ、不安な顔をする選手がいた。彼らの本音は、何が何でも勝ちたいというより、勝てる相手に勝ちたい。負けるにしても善戦したい。楽しめる試合をしたいということなのだろう。それはそれでかまわない。勝ちを目指すことには変わらない。まずは、そこから、チームで勝つということを考えていけば良い。急に性格や行動の癖が変わることなんて難しい。それに、練習時間は限られている。1日1日をほんの少しだけ、頑張ってみることからはじめる。時間を守る。走って行動する。呼びかけに言葉で返す。まずはそこから、はじめる。それだったらできるかも…。選手達のこれからの不安が少し和らぎ、進むイメージが少しずつ見え始めたようだった。

4月中旬。新しい仲間が加わった。1年生の入部だ。15名も入部してくれた。中学の時に硬式でやっていた選手も1/3もいる。投手経験者も多い。選手32名、マネージャー4名と大所帯となった。チームにも勢いを感じた。ただ、現在の金井高校野球部には、決まった練習場所がなかった。コロナ感染症が拡大する前は、平日は地元の企業、住友電工のグラウンドを借りて、毎日、広いグラウンドで練習ができていた。それが今は使用できない。学校のグラウンドは、部活動も多く、おまけに耐震工事でグラウンドが狭くなっている。そのため、練習ができるスペースはたった20M四方のスペースくらい。そこで近くの球場を週1、2回2時間の練習をする。そんな苦しい状況が続いていた。チームとして一つになりきれないところや自信の無さは、そんなところからきているかもしれない。それでも、少しずつ気持ちのコントロールができるようになってきた。戦術の理解も必死に覚えようとする選手もでてきた。土日は練習試合。球場では実践練習を行い、学校では基礎練習を行う。練習のサイクルも出来てきた。

6月、いよいよ夏の大会も間近に迫ってきた。そんな中、県内の強豪私学と練習試合ができた。自分たちの力がどこまで通用するのか試す試合だ。それと同時に自分達だって、できるんだということを感じてもらいたいという思いが指導者達の思いだった。結果は、勝つことはできなかったが、堂々と渡り合うことができた。選手達は、びっくりしていた様子だった。でも、彼らだって、その気になればできる。ほんの少しずつのハードルを毎日越えようとするだけで。間違いなく彼らの自信となった。そんな中、いよいよコロナ感染症の感染防止のために使用できなかった住友電工のグラウンドの使用が認められた。だが、人の使わなくなったグラウンドは雑草だらけ。それでも、除草をしながら、バッティング練習だけは何とかできる。それだけで希望が湧いてきた。今後の金井高校野球部の未来が少し明るくなった。これで、次の代までも継続して、成長していけるような光が見えた。

